

サブの二学期

野村昇司作
小山規絵



サブの二学期



野村昇司作
小山規絵

●著者 野村昇司 (のむら・しょうじ)

1933年神奈川県横浜市生まれ。
横浜国立大学教育学部卒業。
現在、東京都大田区立南蒲小学校教頭。

小社発行の著書に『水のない海』
『竹の三吉』『雪のこんこ』『つきあ
いにくい奴ら』『サブの放課後』
などがある。

[現住所]〒230 神奈川県横浜市
鶴見区市場東中町4-3

●画家 小山 規 (こやま・ただし)

1952年東京都杉並区生まれ。
高千穂商科大学卒業。
大学卒業後、幾つかの職業を経
て、アニメ原動画の仕事に携わ
る。現在、マンガと児童図書の
分野で活動中。児童図書の仕事
に『サブの放課後』『3年生の自
由研究』『4年生の自由研究』が
ある。

[現住所]〒167 東京都杉並区荻
窪1-18-23 翠ハイツB201

サブの二学期

昭和59年10月15日 初版発行

著 者 野 村 昇 司
発行者 山 浦 常 克
発行所 (株)あすなろ書房

〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町551 電話 (03) 203-3350

印刷・壮光舎印刷株式会社
製本・ナショナル製本協同組合

©, S. Nomura 1984
NDC913/192P/22cm

落丁・乱丁本は送料小社負担にて
お取り替えいたします。

8393-61829-0060

ふと
われにかえったとき
わすれていた喜びや悲しみが
よみがえり
そして
自分の知らなかった自分との
対話が始まる



サブの二学期 *もくじ

プロローグ

1

ねらわれるサブ 12

だまってついてこい 21

万引きなんかしていない 25

仲間になんかなるものか 31

2

人は見かけでは…… 40

別人のような木田 45

立候補の目的 57

取り引き 61

人間というものは 67

地郎兄ちゃん当選 74



3

いいすぎだぞ、哲^て

84

二軍落ち

92

地^じ郎^{ろう}兄^あちゃん^はは変わった

98

グローブがない

107

あたたかい心で

113

つかない決心

122

4

都^つ留^るおばさんの話

128

早^さ苗^{なえ}の方がつらいんだ

134

早^さ苗^{なえ}が転校^{!!}

150

最後の朝

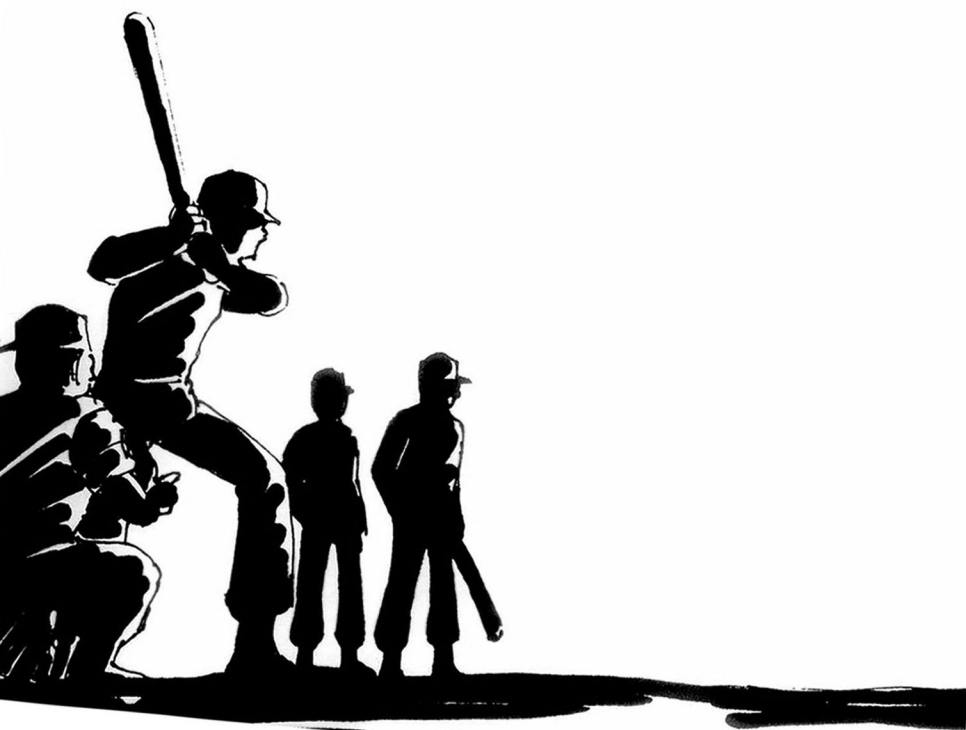
158

さようなら早^さ苗^{なえ}

165

エピローグ

あとがき



プロローグ



「サブちゃん、がんばってよ。あなたがしつかりしてくれないと、母さん心配で……。」

そう、いつもいつていた母さんは、六年生の夏休み、ぼくが林間学校へ行っている間に死んでしまった。島先生と夜汽車で帰ってきたけれど、ぼくの帰りを待たずに、母さんは死んでしまった。

お葬式そうしきの日。

「母さん、心配しないで。」

白いキクの花につつまれた母さんにいったんだ。それが、ぼくの最後の別れのことばだった。

ぼくは泣なかなかった。

ぼくはこらえた。こめかみが痛いたくなるほどこらえていたんだ。

父さんは、伊知郎兄いちろうちゃんと地郎兄ぢろうちゃんとぼくをかかえこみ、

「母さん、この子たちはだいじょうぶだ。」

と、死んだ母さんにいった。

伊知郎兄ちゃんいちろうは泣ないた。

地郎兄ちゃんじろうも泣いた。

でも、ぼくは、じつとじつと、くちびるをかみしめてなみだをこらえた。

「母さん、心配しないで。」

心の中でさけんでいたんだ。

母さんのいない夏休み。

母さんが生きているころは、野球の練習にでかけるぼくをいつもばかにしていた地郎兄ちゃん。その地郎兄ちゃんじろうは、朝早くから野球の練習にでかけるぼくには何もいわなかった。せつせと高校受験のための夏季講習こうしゅうに通っていた。まだ、中学二年だというのに……。

伊知郎兄ちゃんいちろうは高校一年生。毎日、クラブ活動だといって、学校へでかけて行った。ぼくだけが悲しみをこらえていたんじゃない。みんな何かにむちゅうになつていないとやりきれなかったんだ。

兄弟三人、みんなみんな悲しみをこらえていたんだ。

母さんのお葬式そうしきがすんで間もなく、父さんは外国へ出張しゅつちやうしてしまった。母さんの妹の都留とるおばさんがときどききてくれたけど、ほとんど兄弟三人だけの夏休みだった。

ぼくは、母さんのお葬式そうしきのあと、一日野球の練習を休んだだけだ。

野球より他に能のうがないと自慢じまんする哲てつも、死んだ母さんがとてもお気に入りだった、いや、ぼくだってお気に入りの早苗さなえも、心では同情どうじやうしてくれていたようだけど、母さんのことは一言もいわなかった。ぼくの気持ちを考えていてくれたんだ。ぼくは、それがともうれしかった。

野球の練習にうちこんだおかげでライトのポジションから、ふたたびサードのポジションをとりもどした。それがこの夏休みの収穫しゆつかくだった。

「母さん、心配しないで。」

母さんとの約束やくそくをかみしめながらがんばったからなんだ。

去年の夏、母さんといっしょに夜店で買ったむらさき色のキキョウの花がさいている。
夜になると秋の虫が鳴く。いよいよ夏休みも終わりだ。

ねられるサブ
だまってついてこい
万引きなんかしていない
仲間^{仲間}になんかなるものか

1





ねらわれるサブ

二学期が始まった。

秋の少年野球のリーグ戦が近づいていた。野球の練習はきびしかった。

「サブ、いくぞ!!」

監督かんどうがさけぶ。

ノックのボールが砂すなけむりをたてながらむかってきた。むちゅうでグローブを出したが、ボールは、グローブの先をかすめてしまった。

「サブ、顔をそらすな!!」

監督がどなった。

ボールは、スギの木の方へころがった。また、中学生が二人、スギの木の下にきていた。このごろ野球の練習があるたびにきている。

第二中学校の二年生だ。木田と矢広という名まえだそうだ。先週の土曜日、哲が木田になぐられた。ただ、背が高くて生意気だというだけで。哲が本気になれば、あんな中学生の一人や二人、わけなくやつつけられる。哲にはそれだけの体力がある。でも、哲は、中学生とけんかをして、ぼくたちのチーム、リトル旭が、少年野球のリーグ戦に出場できなくなったら大変だと思い、がまんしたんだそうだ。

中学校では二期になると、三年生が高校受験の準備のために生徒会活動や部活動からはなれていく。すると、それまでなりをひそめていた二年生が急にのさばりだすという。地郎兄ちゃんの話によれば、哲をなぐった木田は、三年生になれば、中学校の番長をねらう一人だという。番長になるとき、自分の勢力を広げておかねばならないのだそうだ。そこで、来年中学一年生になるぼくたち六年生をマークしてくるのだ。

哲がなぐられたのは、哲が背が高いからではない。生意気だからということでもない。ほんとうは、哲が中学校へきたら役に立つ奴かどうかためしているのだと、地郎兄ちゃんはいっていた。

ボールが木田と矢広の所へころがってしまった。木田がボールを足でふみつけた。

「すいません。ボールを返してください。」

木田^{きだ}は返事もせず、ぼくをにらんだ。すると、矢広^{やひろ}が、

「地郎^{じろう}の弟だつてな。地郎にはせわになっているぜ。」

といった。

それは本心とは思えなかった。地郎兄ちゃんのことだから、こんな奴^{やつ}らを相手にするわけがない。地郎兄ちゃんは自分より成績^{せいせき}の悪い奴など相手にしない。ぼくだつて、てんで相手にされてはいないんだから、矢広^{やひろ}が地郎兄ちゃんにせわになっているはずがない。

「話があるんだ。練習が終わつたら、熊野^{くまの}神社^{けいだい}の境内^{けいだい}にくるんだぞ。」

木田^{きだ}がいった。そして、ふみつけていたボールをけとばした。ボールを追つたぼくの背^せ中に、

「哲^{てつ}もつれてくるんだぞ!!」

と、矢広^{やひろ}の声が追いかけてきた。

ボールを拾^{ひろ}つて、キャッチャーをしている俊行^{としゆき}に投げ返した。

ボールが次つぎととんできた。ぼくはすくいあげては、ファーストの山崎^{やまざき}に投げた。